

スポーツ戦術の基礎研究 構造論的視点から

松本 真*

キーワード：スポーツ、戦術、体系、外示

1. はじめに

現代の競技スポーツにおいてどのような戦術／戦略を用いるのかということは、大変重要な問題になっている。20年前であれば、相当限られた情報の中で、競技が行われたため、数少ない情報を握った方が優位に立ち、その後どのような戦術をたてるのかということが問題になっていた。つまり、相手の分析やどのような戦術をとるのかという以前に、情報を持っていたかどうか問われてしまっていた。

しかし、今日、ビデオカメラやインターネット等のメディアの発展により、情報を持っているということは当然のこととなってしまった。かえって、大量の情報を処理しなければならず、情報が混乱の要因となってしまっている。当然、戦術を考えるとときにも、大きな要因となり、安易な情報から戦術を立てられなくなってしまった。

このような状況は、実は、バスケットボールやサッカー等と行った攻守混成型集団球技スポーツにおいては、さらに顕著に現れることとなった。この種のスポーツの特徴として、常に局面が変化し、同じ場面がゲーム中にもう一度再現されるのが不明なことが多いからである。そのため、大量の情報がかえって邪魔となるこ

ともある。また、このような状況のなかで、奇抜な戦術が影を潜めている傾向にある。相手チームもほぼ同様の情報をもっていることが推察されることと、もうひとつは、攻守混成型集団球技スポーツがもつ固有の特性がそうさせるのかもしれないとも考えられる。

そこで、このような攻守混成型集団球技スポーツの戦術の取り扱いについて構造論的に論じ、それがどのような性質なのかを解明することを目的とする。

2. 戦術について

2.1. 辞書的意味から

本論のキーワードとして戦術について検討する。まず、手順として、戦術について、一般論を概観する。代表的な辞書である広辞苑で調べてみると、

戦術

(tactics) 戦闘実行上の方策、一個の戦闘における戦闘力の使用法。一般に戦略に従属。転じて、ある目的を達成するための方法

と記述してある。元来は、戦争で使用された用語であることがわかる。そして、そこから転じて、同様なプロセスをとる行為にも使用され、現在のように、スポーツにも同様に使用されたようだ。

* 埼玉大学教育学部保健体育講座

また、ここで、戦略という用語も出てくるので、それについても調べると、

(strategy) 戦術より広範な作戦計画。各種の戦闘を統合し、戦争を全局的に運用する方法。転じて、政治社会運動などで、主要な敵とそれに対応すべき味方との配置を定めることをいう。

とある。これも戦争の用語であるとともに、戦術よりもきわめて広範な意味をなしていることがわかる。

上記のことから、スポーツの世界、特に競技スポーツの世界は、戦いというアナロジーにより、戦術、戦略という用語が使用され、一般化したことがわかる。しかしながら、アナロジーから用語を使用することになるということは、用語の定義や、使用方法等において曖昧な部分が出てきてしまう傾向も秘めている。そもそも戦うという意味では同じでも、戦争とスポーツは全く異なるものであることは、明白である。そこで、アナロジーによって使用されるようになった用語であることを念頭に入れながら、スポーツ、特に競技スポーツの現場での戦術、戦略の使用のされ方、考え方を観ていきたい。

2.2. スポーツ科学研究から

戦術や戦略について論じられるのは、スポーツ科学の現場であることが多い。そこで、その現場でどのように用いられ、考えられているかを概観する。

まず、戦術と戦略の違いについてであるが、前述の戦術と戦略の相違とおなじく、戦略は、大きな観点からゲームを観る、それに対して、戦術は戦略の範囲内で、最も具体的で詳細な部分二焦点を当てる。スポーツの場面では、最も戦略的と考えられるものに、「長期計画の立案」があり、最も戦術的と考えられるものとして、「具体的な試合中の行動」となる。当選のことながら「長期計画の立案」と「具体的な試合中の行動」の間には、更に細かく項目をもうけることはかのうですし、スポーツの現場において

そのようにして分析をしているでしょう。このことは、戦略と戦術をどこからどこまでというように、線引きすることが不可能であることを意味し、「したがって、今日なお『戦略』と『戦術』という用語は、種目が異なれば意味が異なり、人が違えば内容が違うというように、その概念を定義することさえままならない状況なのである」ⁱ。全く上記のような現状であるが、しかし、引用の表現で少々誤解を招きそうな部分があるので、指摘しておく。戦術と戦略の定義という議論では、それぞれの領域を決定することに主眼がおかれ、その結果として、両者の境界線を引くことに終始してしまう。しかし、現実的には、そのことには、それほど意味がないと考える。上記の引用が意味することは、人が違えば、内容が違うということはその境界線が異なるということである。しかし、この種の定義をこのような形で行うことには、それほど意味はないと考える。戦術、戦略のそれぞれの要素、中心的な部分が明確であれば、その中間は、グラデーションのように境目を探すことは困難であり、さらにいえば境界線を引くことなどできない。つまり、それぞれの内容については、より明確にしなければならないが、境目については、それがどこであるのかは大きな問題ではないと考える。

さて、このような議論をふまえて上で、本論で対象としているスポーツの戦術についてのこれまでの議論を概観する。

一昔前は、コーチ自身の経験が戦術のすべてであり、それを伝えるというきわめて狭い世界で行われていて、まさに、それはチームの秘密であり、また、強さでもあった。また、その内容についても、指導者の経験に基づいたものであり、きわめて個人的なものも多かった。このような状況は、『ほとんどのことはトレーニングできるのであるが、試合経験(=戦術)はそうはいかない』という考え方は反映ⁱⁱされていることに他ならない。当然のことながら、スポーツの場面では、経験という要素は重要なものと

して現代でも扱われる。例えば、現代でもよくいわれる経験に基づいた戦術的助言（格言）に、「相手の足の構えに注意する（格技、球技）。相手のリズムを妨害する。常に相手の弱点を攻撃する」ⁱⁱⁱなどである。現代でもよく言われることであるし、また、十分に通用することでもある。

しかしながら、「試合で経験を積んで『戦術的に成熟していくこと』に関して、ほとんどの部分が選手に委ねられたまま」^{iv}となっているという。特に、攻守混成型集団球技スポーツにおいては、このような側面がまだまだ多く残されているという。

しかしながら、その後は、メディアを中心とした情報がごく一部のものではなく、一般的になってきた。そこでは、情報を知っていたのかどうかではなく、どれだけ有効な情報を持っていたのか、ということが問題になりだした。そして、戦術をどのように扱うのが競技力を規定する一要因となった。そのために、以前の秘密主義的な体質から、より具体的な戦術の内容が体系化されて、多くの人々に共有されるようになった。

2.3. 具体的な戦術について

競技スポーツの更に具体的な戦術はというと、多種多様である。そのため、最も具体的と考えられるのが、それぞれの競技種目ごと個別にそれぞれ戦術がある。競技スポーツといえども、種目によっては、単純に勝利だけを目標にするのではなく、記録を目指すための戦術（世界記録をねらう等）というものも存在し、その世界では認知されている。また、場合によっては、勝つための戦術というよりは、負けなための戦術も考えられる。例えば、陸上競技などは、典型的である。「投てき種目、走幅跳、三段跳では、選手の試技が一人一人別々に行われるので、『記録のための戦術』と『勝つための戦術』を区別することは難しい。これに対して、走り高跳びや棒高跳びでは、バーのあげ方に関連して、この二つを区別することができる。た

えば、余裕を持ってクリアーできる高さをまずはじめに跳んで記録を確保しておき、その後一気に高さを上げて記録をねらうという方法である。これは試技数を減らして体力を温存し、集中力を維持してベストの状態の高い記録に望むための戦術とみなされる」^v、等である。

この二つの戦術は、勝つと記録達成が同時に獲得することができないことがある。このように概観していくと、競技スポーツの戦術であるから、単純に勝利を目指すというだけではなくきわめて多様であることが分かる。

しかしながら、上記のような状況であるからといって、簡単にあきらめるのではなく競技スポーツをある程度分類することで、戦術とは何たるかを解明するための第一歩としたい。当然のことながら、その分類の仕方にも様々であるが、個人スポーツ、対人スポーツ、集団球技スポーツなどに大別することは可能であろう。その上で、更に詳細に観てみると、それぞれの中でも、分類することが可能である。さきにのべたとおり、本論では、バスケットボールやサッカー等の攻守混成型集団スポーツにしぼる。

さて、この種の攻守混成型集団スポーツについての戦術は、大枠として攻撃戦術と防御戦術が考えられる。攻撃戦術における共通の課題として「a 防御ラインを破る（ノーマーク） b 人数的優位をつくる（オーバーナंबर） c 空間的優位を作る（オープンスペース）」^{vi}があげられる。防御戦術における共通の課題として「a 防御ラインを破られない、 b 人数的優位をつくらせない、 c 空間的優位をつくらせない」^{vii}があげられる。これらのことをよく検討すれば、わかることであるが、この種の競技は、攻撃と防御が表裏一体となっているので、攻撃面で狙うべき点は、防御面では防ぐべき点であることが大きな特徴である。またこれらの課題を解決するためには、個人の戦術から、グループ戦術、そしてチーム全体の戦術と考えられる。これらは、戦術、戦略のところで見た通り、どこで区別するのかは、難しい問題であるが、しかしな

がら、チーム全体の戦術から、グループ、そして、個人へという流れが自然であろう。当然、その逆も考えられる。例えば、一人の優秀な選手がチームに所属した時には、その選手の希有能力を最大限いかすために、個人から出発して、最終的にチーム戦術が考えら得ることもある。以外かもしれないが、勝利という目的のためのなら、個人から出発した戦術の方が比較的短時間で成功を収めることが多いと考えられる。戦術的には、個人の選手の能力に頼るので、その選手を全ての中心に考えればよく、戦術の焦点を絞りやすいというメリットがある。しかし、周囲の選手が一人の選手ための単なる駒となってしまうチームとしての問題は残る。

上記のように、現代の競技スポーツにおいて、かなり具体的で、体系的な戦術論は存在する。それを、実際に適応するということになる、かなり難しい部分がある。それは、どうしてなのかという点について、言及してみたい。

そのために、まずは、スポーツについて論じたいと考える。なぜなら、このような困難さは、スポーツ文化が内包する特質が関係していると考ええるからである。

3. 文化としてのスポーツ

日本のスポーツ界の現状を考えると、スポーツと体育との区別をしなければならない。なぜならば、議論を混乱させる要因の一つに体育とスポーツを同等と扱う、もしくはそれに近い状態で扱うことにあるからである。

また、文化としてのスポーツを論じる時にも、払拭せねばならない潜在的な固定観念がある。このことは、文化をどのように考えるかという問題に起因している。ところで、スポーツを文化として論じる時の代表的な分類は、次のようなものがあるとしている。「高尚で価値あるものであることの主張」「社会的文化的現象であることの強調」「社会学や人類学の定義に基づく議論」¹¹⁾などである。この三つの代表的な議

論の中でも最初にとりあげた議論が、スポーツを文化として論じようとする時に亡霊のようにつきまとう議論である。それは、スポーツは、他の文化よりも、特に、芸術や音楽等の文化よりも一段劣っているのではないかというものである。そのため、スポーツ文化論は、多少の温度差はあるが、いかにスポーツが価値あるものか、高尚であるのかを前面に押し出すのである。この背景には、代表的なスポーツの一つであるフットボールの歴史が、暴力や野蛮さとの戦いであったことがあるであろう。また、スポーツは、単なるお遊びと一般的にみられることも一因であろう。そして、身体の神秘に対する恐れなどに考えられる。

そこで、スポーツを論じる時に、このような議論に対してどのように対処していけば良いのかということがまず問題になる。そこで、価値の問題を考えてみる。上記のような議論には、どのような文化が高尚か、つまり、価値が高いのかという議論が問題となっている。ところで、価値が高いとはどのようなことであろうか。まず、根本的な価値のことに着目すべきである。

価値とは、辞書によれば、「物事に役立つ性質・程度。～『よい』といわれる性質」¹²⁾などとなっている。上記の議論のベースは、価値を「よい」か「わるい」かという観点によって、判断している。その「良い」「悪い」の判断基準が曖昧であり、また、時代によって変化しうるもので、絶対的なものとはいえない。なぜなら、このような価値では、主観的になり過ぎてしまうからである。そこで、もっと客観性を求めて、ドラスティックに観点をを変える必要がある。

佐藤は、体育概念とスポーツ概念の混乱を是正し、議論をより明解なものにしようとする試みからスポーツの文化性について論じている¹³⁾。以下にその概略を示す。佐藤は、体育は、関係性を基礎とする教育概念の身体面のことを指し、一方で、スポーツは、実体概念としての文化概念であるとして、体育とは、その構造、概念が全く異なることを指摘する。そのために、体育

とスポーツは同一の次元で論じることとはできないのである。その上で、文化間の差はたんなる区別であるとする差異論的アプローチを行い、文化概念を文化現象と文化構造に分ける。

通常のスポーツを見ている時に、その現象面だけに囚われがちになるが、実のところ、我々はそれだけを見ていろいろと感じているわけではない。様々な現象の奥底に、ある種の構造を持ったものをも見ているのである。佐藤は、「スポーツが文化だとするならば、われわれからは独立した独自の『構成体』として存在している」として、このような構造について言及し、それを、スポーツ構造と名付けている。それに対して、前者の現象面については、スポーツ現象としている。そして、スポーツ構造は、「個々人から独立した或る『体系 system』を構成していると」考えられるとしているのである。さらに、このスポーツ構造は、自ら作ったものに、自らが支配されるという疎外構造を持つとしている。ここでいうスポーツ現象とは、現実スポーツ場面のことをいい、そこでは、同じ場面が二度と出現しない一回性の原理が横たわっている。そして、疎外体としてのスポーツ構造は、三つの要素から成り立っていると考えられる。知的要素、身体的要素、感性的要素の三つのである。知的要素は、スポーツで行われる全ての知的作業のことをさし、本論で問題にしている戦略、戦術、トレーニング方法等があげられる。身体的要素として、スポーツのおいてみについた身体の扱い、運動の形式といわれるものである。ただし、具体的な目に見える身体の動きの形態とは異なる。感性的要素は、価値観や倫理観といったことに相当する。よくいわれるスポーツ特有の価値観のひとつであるスポーツマンシップ等は、その一例である。また、一見スポーツとは関係のない価値観や倫理観、例えば、日本独自の価値観などある文化圏特有の価値観などがスポーツ場面に表出すれば、そのような価値観もその対象となる。また、この三つの要素は、スポーツ構造を形成する要素、または、スポー

ツ構造を分析するための視点と考える。そのため、実際には、それぞれがスポーツ構造の中で独立した存在としてあるのではなく、それぞれが複雑の関係しあった複合的構成体としてある。この当たり前の事実が、スポーツ構造の分析を困難にさせる。

文化としてのスポーツを論じる時、このような差異論的文化論は、スポーツに対する偏見を払拭すると同時に、スポーツ現象と切り離して、スポーツ構造を抽出することによって、スポーツを分析可能なものにする意味で、きわめて有益であると考えられる。競技スポーツにおける戦術を分析する時にも、差異論的文化論による分析は、きわめて重要であるし、我々に大いなる示唆を与えると考える。

4. 戦術の体系化とは、

さて、戦術についてこれまでの概観と文化としてのスポーツをどのように考え、分析可能するかという問題について論じてきたわけであるが、ここで、これまでの戦術に対する考え方、認識を否定するというよりも、これまで良いとされてきた戦術に対する考え方は何が良かったのかを検討する。

そこで、差異論的文化論としてのスポーツ、特に攻守混成型集団球技スポーツにもう一度着目する。スポーツ現象とそれを支えるスポーツ構造に分類したわけであるが、スポーツ戦術、特に集団球技における戦術において、このことが意味することが重要である。バスケットボールなどのこの種の競技は、一見して分かるように、同じゲーム状況は、二度と出現しないという「一回性」の原則をもっとも体现している種目である。そのため、このような表面的に見えるスポーツ現象をそのまま鵜呑みにするということは、戦術を考える上で、混乱を招くだけである。例えば、ある試合で、ある選手が活躍した時に、それが偶然の産物であったのか、それとも綿密に計画されたものであるのかというこ

とが、区別できなくなり、ゲームにおいて全く的外れな戦術を行うことになる。そこで、いかにスポーツ現象の位相ではなく、スポーツ構造の位相に目を向けることができるのかということが問題となる。

先の議論で明らかのように、スポーツ構造は、体系としてある抽象的な概念である。バスケットボールのゲームを見て、「一回性」の原理によって二度と出現しない現実を目の当たりにしているとしていることは理解していても、バスケットボールのゲームのものであるという認識はできる。そこには、バスケットボールのコート、リングで行われ、バスケットボールを使用し、選手がバスケットのユニフォームを着用し、バスケットボールシューズを履いているという具体的な物的証拠を認識しているだけではなく、ゲームの中に、バスケットボールの基本的な構造、体系を見だし、感じているからである。そこには、ただ単にバスケットボールのルール二のとっているというだけではなく、基本的なバスケットボールやり方、戦術を見て取ることができるからである。このことか考えても、戦術を考えることは、スポーツ構造のいそうであることが分かる。

さて、スポーツ構造をもう少し詳細に概観することにしよう。そうすることでさらに戦術についての考察が深まると考える。ところで、スポーツ構造はどのような性質を持っているのかということについて、重要な示唆を与えてくれるのが、ソシュールの言語理論である。ソシュールは、言語学について「言語学には二つの異なった科学がある。静態または共時言語学と、動態または通時言語学がそれである」^{xi}と考へ、それまで、主流であった言語の起源を探ろうとする通時言語学に対して、構造的に言語をとらえる共時言語学を提唱した。そして、「ごく身近な日常言語現象への疑問から出発して、ソシュールはまず人間のもつ普遍的な言語能力・抽象能力・カテゴリー化の能力およびその諸活動をランゲージ language とよび、個別言語共同体で

用いられている多種多様な国語体をラング langue とよんで、この二つを峻別した」^{xii}。そして、さらに「パロールとは、ラングという社会契約によって自らの能力を実現する個人の行為の謂である。パロールの中には、社会契約によって容認されたものの実現という概念がふくまれている」^{xiii}とした。つまり、言語を抽象度の高さによって、より具体的なパロール、そして、ラング、最も抽象的なランゲージュの三層に分類した。上記のように、最も抽象度の高いランゲージュは、普遍的な言語能力、言語を創出する能力であり、ラングは、日本語なら日本語の体系というような多様な言語体系、パロールは、実際の言語使用と分類できる。また、ソシュールは、ラングの特性として、単なる多様な言語体系にとどまらなないと考えている。「このラングは一つの価値体系であり、その価値は一切の自然的・絶対的特性による規定をのがれる純粋な関係の網の対立から生ずる」^{xiv}というように言語持つ体系の性質を述べる。さらに、このことから敷衍して、社会制度も同様の体系であるとし、それは文化の体系へと言及されるのである。スポーツ文化も同様な体系を有すると考えることができる。先のスポーツ構造は、この三つの分類では、ラングの位相に相当し、スポーツ現象は、パロールに相当する。

戦術について考えるというとき、スポーツ現象を扱うことはできない。そこで、スポーツ構造に着目する必要がある。

5. 戦術を構成する外示的機能

競技スポーツにおいて、特に攻守混成型集団球技スポーツにおいて、戦術の対象となるのが、スポーツ構造であること。そのことを踏まえて、先に検討した一般的な戦術をもう一度見てみると、きわめて平易な言葉、単純な言葉によって、分析されている。「a 防御ラインを破る（ノーマーク）、b 人数的優位をつくる（オーバーナンバー）、c 空間的優位を作る（オープンスペー

ス)』^{xv}など、よく見ればきわめて当たり前で、少し知識があれば、誰でも知っている言葉によって構成されている。このことは何を意味するのであろう。

まず対象となるスポーツ構造は、特に、その中でも戦術の対象となるであろう知的要素は、抽象的な体系としてあり、他の学問の体系がそうであるように、きわめて意味を限定された言葉（記号）によって構成されている。典型的なものは数学であり、数字と数学記号によって、構成されているといっても良い。同様に、スポーツ構造の知的要素もそのような言語で構成されていると考えられる。このような言語（記号）の外示的機能を持つとして、物事を分析したり、表現したりすることにきわめて有効であることは知られている。スポーツの戦術も全く同様であると考えられる。そのために戦術といってもそこで使われる言葉、さらに言えば、戦術を構成する分析の視点と体系は、無味乾燥で、より一般的な言葉で構成されることになるのは、ある種、当然のことと考えられる。

6. まとめ

競技スポーツの戦術というときわめて高度であり、また、複雑であるというイメージがあるが、本論のように考察を進めていくと、そこで構成された言葉は、単純できわめて簡単な言葉によることが分かる。しかし、それ故に、戦術が文化圏を超えて、世界中に広まり、そして、共有されることが可能となるのである。また、実際のゲーム、特に攻守混成型集団球技スポーツのゲームを分析し、戦術を立て、戦術行動を起こすとき、このようなシンプル分析の視点を持ち、また、それが使いこなせるようにすることが大切であることがわかる。

今後は、更に研究を進めていき、このシンプルな戦術的単語が、どのようなものが、どれくらいあるのかを考察していきたい。

A basic research in tactics of sports

From a view of structuralism

- i ヤーン・ケルン著(朝岡正雄他監訳)「スポーツの戦術入門」大修館書店 1998年東京 p21.
- ii 同上書 p32.
- iii 同上書 p33.
- iv 同上書 p32.
- v 同上書 pp.37～38.
- vi 同上書 pp.39～40.
- vii 同上書 p40.
- viii 1995年1月号 第48巻第1号 学校体育 日本体育社 東京 文化としてのスポーツの学習と指導 p.14.
- ix 広辞苑 第5版
- x 佐藤臣彦(平成13年)体育原理研究第22号 pp.1-12. を参照。
- xi 丸山圭三郎「ソシユールの思想」岩波書店 1981 p.105.
- xii 同上書 p.79.
- xiii 同上書 p.83.
- xiv 同上書 p.90.
- xv 同上書 pp.39～40.

(2006年9月29日提出)

(2006年10月13日受理)